

平成22年6月1日現在

研究種目:基盤研究(C)

研究期間:2007~2009

課題番号:19500682

研究課題名(和文) 高校生と児童が共に育むピア・エデュケーション(食教育)の継続実践とその追跡研究

研究課題名(英文)

A study about the peer education (appetite education) that a high school student and a child bring up together

研究代表者

住田 実(SUMITA MINORU)

国立大学法人 大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号:90136771

研究成果の概要 (和文):

本研究においては、「地域に根ざした食教育内容・教材・方法」と「ピア・エデュケーション」との相乗的教育効果の追究をめざして、以下のような研究を実施した。

- 教育内容研究にあたっては、児童を対象とした事前の食生活実態アンケート調査の結果をふまえて、生活化につながりやすいテーマを設定して実践した。
- ピア・エデュケーションの実践にあたっては、高校生と児童が共に活動する「クイズ」「ゲーム」「合唱」に加えて指導内容に直結した「食べる授業」の導入により、印象深い展開を工夫した。
- 事後のアンケート調査により、児童たちは教師よりも年齢の近い高校生による食育指導にほぼ全員が好意的な感想をもつとともに、生活化への意欲向上も明らかとなった。
- 一方、ピア・エデュケーションの実践にあたった高校生へのアンケート調査より、児童を対象とした教材研究や指導に向けての研修をとおして、食育について「自ら目的意識をもって学ぶ」ことの実感や質の高い学習効果が確認された。

以上の成果は、専門誌上並びに講演・講習等の機会をとおして発表した。

研究成果の概要 (英文):

In this study, I aimed at the investigation of the synergistic education effect with appetite education and the peer education based on the area. In an educational practice, I was based on a result of the prior questionnaire survey for the child and set the theme that was easy to lead to life. In practice of the peer education, I introduced the "quiz" "game" "chorus" that a high school student and a child were active together and "a class of the cooking training". According to the questionnaire survey after the fact, the children had the impression why all the members were approximately favorable toward guidance by the high school student.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・食生活学

キーワード：食育、食教育、食育プログラム、ピア・エデュケーション、学校栄養教育、食教材研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 筆者の6年間に及ぶ継続研究を踏まえた経緯から

筆者の勤務大学が所在する県内には、いくつかの「小・中・高校の一貫教育地域」があるが、その中の宇佐市安心院(あじむ)町では、1992年より「高校生が地元の出身小学校を訪問」することによって「調理実習も含めた食育」を実践しているきわめて興味深い事例がある。筆者はその初年度より支援者として双方の学校を継続訪問し、とくに高校生には年間で計2週間に及ぶ指導・支援を担当している。

これまでの継続研究の成果は簡単ながら報告している(住田 実、[これからの『食べる授業』への提言] 多様なジェネレーション(世代)の交流とその豊かな可能性、『授業づくりネットワーク』17巻10号、2004年/子どもたちの健康認識を高め自立を支援する健康教育の新たな“学び”を追って～<異年齢・同世代の仲間集団>が育む豊かな学びあいの可能性～、『健康教室』56巻9号、2005)が、その特色をまとめると次の5点があげられる。

- ① 高校生が地元の小学校を訪問して健康教育を行うというピア・エデュケーションの形態。
- ② 毎年度ごとの指導内容・教材づくりの「積み上げ」による児童への好影響……訪問指導の「導入」では、昨

年度の内容を知らない1年生児童のために「ダイジェスト劇」を挿入。

- ③ 同時に、高校生が「小学校児童にもわかるような教材づくり」や「話し方」を自主的に学ぶ過程で、食教育をめぐる認識の深まりと学習効果はきわめて高い。
- ④ 「保健劇」のあとに続く「食べる授業」での食材は、児童たちが学校の教育課程での「生活科」「総合的な学習の時間」において栽培した作物を使用……このことにより、地産地消からさらに食物に対する愛着と興味が芽生えるという効果を生む。児童たちにとって、自らが栽培した作物が「健康的な食材」として利用されるという経験はきわめて貴重であり、小学校側としても年間の教育計画として訪問授業を重視している。
- ⑤ 上の3点目と関わって、児童に「わかりやすく教える」ために「自発的に学ぶ」という経験を通した高校生たちの中からは、保育、教育、栄養関係の進路に進み、卒業後も訪問指導の支援にあたる人材も輩出するなど、当初は消極的だった生徒たちの目を見張る変容が見られた。

(2) 食育シンポジウムでの実践発表

以上の成果は、西日本地区の食育関係者を対象にしたシンポジウム(岡山県立大学保健福祉支援センター主催/第4回晴れの国鬼ノ城シンポジウム:これからの「食育」への提言/コメンテーター:足立己幸氏)におい

て、高校生と児童による「地域に根ざした食育の実践例」として紹介され、とくに栄養教諭、学校栄養職員を中心に反響を呼んだ。
(http://www.oka-pu.ac.jp/page/hokenhuku_shi_shien_center)

2. 研究の目的

(1) 系統的な食と健康生活の科学

国民の健康課題としての生活習慣病の増加やメタボリック・シンドロームへの基本的な対応策としての「食教育」は、栄養教諭制度の創設や「食育基本法」の成立、さらには「食育推進基本計画」(内閣府)の発表を持ち出すまでもなく、とりわけ将来を担う児童生徒を対象とした「効果的な食教育プログラム」の必要性とそれへの期待はますます高まっている。

そのような中で2006年に厚生労働省・農林水産省によって公表された「食事バランスガイド」(http://www.maff.go.jp/food_guide/cheekbookhp.pdf)は、食教育の指導内容を総括的かつ簡潔な指針としてまとめたものといえ、もちろん従来の家庭科、保健体育科(保健分野)における「食生活」関係の教育内容も系統的な「食と健康生活の科学」を体現した教育課程として重要な意義を有していることは無論である。

(2) <地域に根ざした食育実践研究>としての高校生と児童による「ピア・エデュケーション」への着目

その一方、多様な教育アプローチを目指す視点から、近年の「地域の時代」を反映して「地産地消」を生かした教育プログラム(取材活動や調理実習 etc.)も脚光を浴びている。それはいいかえれば、各々の個人がその地域に生きているならば、<地域に根ざした観点>から独自の食育の展開がなされるべきという立場であり、まさにこの2つの観点は<

相互補完的>かつ有効な相乗効果が期待されると思われる。

それに加えて、健康教育の現場では、「教師や親、あるいは専門家による一方的な指導型の健康教育では一定の限界がある」ことが度々指摘されてきたが、その1つの打開策として「ピア・エデュケーション」が注目されていることは周知の通りである。

といっても、ピア・エデュケーションは、従来の教育方法に唯一無二のものとして提案されたものではなく、多様な教育的アプローチが追究される中から生まれた1つの有力なアプローチに過ぎない。しかしながら、その効果に関しては、広く性教育、薬物乱用防止教育などで目覚ましい効果が立証されており、「この手法は、思春期の人々の主体的な行動変容を支えるために有効な方法であるとWHOはじめ、国際的レベルで高い評価を得ている」(高村寿子、ピア・カウンセリングで進める健康教育の可能性、健康教室、56巻9号、1995 / WHO: Approachs to Adolescent Health and Development : prince for success. WHO/ADH, 1992)といわれる。

*

そこで本研究では、はじめにも述べたように、<地域に根ざした食教育内容・教材・方法>をそれのみで児童生徒に伝達するのではなく、同じ町に住む高校生一児童同士の「学びあい」に特色をもつピア・エデュケーションと融合させることによって、一層有効な食教育の展開を追究する。同時に、これまで(本研究申請以前)の6年間にわたる継続にあわせて、さらに「3年にわたる追跡事例研究と教育評価」により、「食教育プログラムにおけるピア・エデュケーションの意義と可能性」について明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究目的を達成するための研究計画と方法について

本研究においては、＜地域に根ざした食教育内容・教材・方法＞とピア・エデュケーションとの相乗的教育効果の追究をめざして、以下のように研究を計画する。

- ① まず基礎研究①として、＜地域に根ざした食教育実践＞の先行研究動向と課題について、文献的に明らかにした。
- ② 次に基礎研究②として、ピア・エデュケーション関係の内外先行文献を収集し、その文献考察で明らかとなった問題点や課題をめぐって、既に参考文献としてあげた高村寿子氏(自治医科大学教授)ら専門研究者への「聞き取り調査」や関係研究サークルへの参加をとおして研究課題を明らかにする。
- ③ また上と並行して、既に触れた安心院町における「高校生と児童のピア・エデュケーション交流(安心院高校と佐田小学校)」の6年目以降の計画と実践を行う。実践にあたっては、最終年の「研究のまとめ」に向けて、視聴覚機器も利用した実践記録をとった。
- ④ 本研究の最終年度においては、本研究申請以前も含めた9年間にわたる「指導計画・内容・教材研究に関する資料」をはじめとして、「実際の指導場面のビデオ収録」並びに指導者への「インタビュー」「アンケート調査」も含め研究資料の収集を実施した。

(2) 教育実践の効果判定について

各年度における「教育内容・教材」の系統性については、授業研究の観点から分析するとともに、児童、高校生を対象とした授業実践前後の「生活実態調査」「食認識調査」、「感想文」、及び高校・小学校側教師、児童の保

護者(訪問授業には例年、保護者も参加している)を対象とした「感想文」「聞き取り調査」をとおして分析・検討する。また、その結果は、広く食育関係・健康教育専門誌上において公表するとともに研究成果報告書を作成した。

4. 研究成果

19年度においては、まず基礎研究として、＜地域に根ざした食教育実践＞の先行研究動向と課題について、文献的に明らかにするとともに、ピア・エデュケーション関係の先行文献を収集した。次に本研究のメインテーマである「高校生と児童が共に育むピア・エデュケーション(食教育)の継続実践」について、「教材研究」の視点から考察を加え、その成果をもとに今後の計画を立案した。安心院高校と佐田小学校の教育実践にあたっては、事前の「教育内容・教材研究」を高校生と共同で取り組み、実践当日は記録を担当するとともに、学校側からの求めに応じて「佐田小児童と安心院高校生の食育6年間の歩み」について講話を行った。19年度の研究成果の一部は、「ゲームで食育・佐田小学校で安心院高校生が講座」と題して『大分合同新聞』(2008年2月29日)により取材、報道されるとともに、健康教育専門誌において発表した。



『大分合同新聞』(2008年2月29日)



4グループに分けてのピア・エデュケーション（高校生－小学生）

20年度においては、「高校生と児童が共に育むピア・エデュケーション（食教育）の継続実践」について、本科学研究費獲得以前から継続している学校現場の過去6年間にわたると実践内容を「教材研究」の視点から考察を加え、その成果をもとに次年度の計画を企画した。「高校生と児童のピア・エデュケーション交流（安心院高校と佐田小学校）」の教育実践にあたっては、事前の「教育内容・教材研究」を高校生と共同で取り組み、実践当日は記録を担当するとともに、教育現場からの求めに応じて「佐田小児童と安心院高校生の食育7年間の歩み」について講話を行った。20年度の研究成果の一部は、健康教育専門誌において発表した。



高校生の手づくり食育教材の説明
に聞き入る児童たち(1～6年生)

21年度においては、「高校生と児童が共に育むピア・エデュケーション（食教育）の継続実践」をめぐって、高校生と児童が共に活動する「クイズ」「ゲーム」「合唱」に加えて指導内容に直結した「食べる授業」の導入により、印象深い展開を工夫した。

また、事後のアンケート調査により、児童たちは教師よりも年齢に近い高校生による食育指導にほぼ全員が好意的な感想をもつとともに、生活化への意欲向上も明らかとなった。

一方、ピア・エデュケーションの実践にあたった高校生への事後アンケート調査より、児童を対象とした教材研究や指導に向けての研修をとおして、食育について「自ら目的意識をもって学ぶ」ことの実感や質の高い学習効果が確認された。

なお以上の3年間にわたる研究成果の一部は、下記の招待講演・研修会（栄養教諭・学校栄養職員関係）において発表した。



『大分合同新聞』（2010年2月21日）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 住田 実：個に寄り添い、個の成長を見つめて～私の健康教材づくりの“心の旅”～、健康教室、第58巻9号、2008
- ② 住田 実：〔授業成立の基礎・技術教師教育物語〕高校生ゲストティーチャーの成長の姿に『将来の自身の姿』を重ねる“教師の卵”たち、授業づくりネットワーク（学事出版）、第21巻3号、2008年
- ③ 住田 実：子どもたちの健康認識を育む

ヨコ糸（年間指導）とタテ糸（学年積み上げ）を紡いで～＜異年齢・同世代の仲間集団＞が育んだM君とUさんと私の6年間～、健康教室（東山書房）、第58巻9号、2007年

〔学会発表〕（計5件）

- 住田 実、〔実践発表〕教育ファームを瞳が輝く教室に～「『教育ファーム』実践ファイル」と「子ども向けワークシート」の活用～、2010年教育ファーム推進全国大会（食・農・暮らしをつなぐ農林漁業体験）、2010年1月（東京国際フォーラム）
- ① 住田 実、【基調講演】健康・食育教材とくからだ健康の小宇宙＞を旅して、第57回北海道学校保健研究大会、2009年10月（登別市民会館）
- ② 住田 実、【基調講演】子どもたちの心に響きく生活化＞への意欲を引き出す「生活習慣病の予防」の教材づくり、平成21年度・北陸三県（富山・石川・福井）学校保健研究協議会、2009年8月（福井市民会館）
- ③ 住田 実、【招待講演】小学校における食育の推進～子どもたちの瞳を輝かせる授業づくり・教材づくり～、平成21年度岡山県総合教育センター研修講座（小学校「家庭」研修講座）、2009年8月（岡山県総合教育センター）
- ④ 住田 実、【招待講演】〔栄養教諭・学校栄養職員のための教材・教育方法論〕子どもたちの瞳を輝かせる食育・栄養指導の教材づくり、2008年9月（岡山県立大学）
- ⑤ 住田 実・今井敬子：【事例発表】小・中学生と「未来の教師の卵」が大分県の3地区で共に育む教育ファーム～南院内小学校・佐田小学校・東飯田中学校・大分大学～、平成20年度 農林水産省「にっぽん食育推進事業・教育ファームモデル事業」九州・沖縄ブロック「教育ファーム成果発表・交流会、2009年2月（熊本市国際交流会館）

〔図書〕（計2件）

- ① 住田 実（分担執筆）：農林水産省・平成21年度にっぽん食育推進事業「教育ファーム推進事業」／監修『子どもが変わる地域が変わる「教育ファーム」ステップアップガイド』、農山漁村文化協会、2010年
- ② 住田 実（分担執筆）：平成20年度にっぽん食育推進事業「教育ファーム推進事業」／監修『子どもが変わる 地域が変わる 「教育ファーム」実践ファイル』農山漁村文化協会、2009年

〔その他〕

●新聞（計2件）

- ① 「ゲームで食育・佐田小学校で安心院高校生が講座」『大分合同新聞』2008年2月29日
- ② 「クイズで楽しく・高校生が食育講座」『大分合同新聞』2010年2月21日

●ホームページ（計4件）

- ① 2009年農林水産省・食育コンクール・データベース：住田 実「教育ファームを瞳が輝く教室に！」 http://nipponisyokuiku.net/concour/db/1ist_nendo_2009.html
- ② [2008年農林水産省・にっぽん食育推進事業]子どもが変わる地域が変わる・教育ファーム実践ファイル（住田 実「未来の教師の卵・大学生たちの教育ファーム」） <http://edufarm.jp/jitsu/image/key08.pdf>
- ③ 2008年農林水産省・食育コンクール・データベース：住田 実「佐田小児童—安心院高校生—未来の教師の卵（大分大学生）による食育ピア学習」 http://nipponisyokuiku.net/concour/db/sel_page.php?sel=area80_01&nendo=2008
- ④ [2009年農林水産省・にっぽん食育推進事業]教育ファーム・ステップアップガイド（お話＋ビジュアルで相乗効果！教育ファームの素材を使って） <http://edufarm.jp/step/image/step03.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

住田 実 (SUMITA MINORU)

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：90136771